

A・ヴェルジェス
D・ユイスマン

哲学教程 下

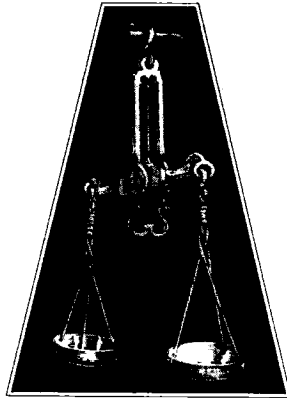
白井成雄
久重忠夫 訳
高橋 勝

筑摩書房

A・ヴェルジェス
D・ユイスマン

哲学教程 下

白井成雄
久重忠夫 訳
高橋 勝



筑摩書房

訳者略歴

白井成雄 (しらい しげお)

1933年生れ

1959年 東大仏文科卒業

現在 名古屋大学教授

久重忠夫 (ひさしげ ただお)

1936年生れ

1959年 東大教養学科卒業

現在 専修大学教授

高橋 勝 (たかはし まさる)

1937年生

1964年 東大倫理学科卒業

現在 浜松医科大学助教授

哲学教程 —リセの哲学

(下)

1980年9月30日 初版第1刷発行

訳者 白井成雄
久重忠夫
高橋 勝

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 { (291) 7651 番(営業)
(294) 6711 番(編集)

振替 東京 6-4123 番

郵便番号 101-91

© 1980

0010-30702-4604

大日本法令印刷・積信堂製本

《認識と理性》

1章 言 語

2章 論理的思惟

3章 数学の哲学

4章 物質科学

5章 生あるものについての認識

6章 人間科学

7章 理性の諸原理

8章 真 理

9章 神の問題

〈付〉 哲学授業を聴いて 久重忠夫

訳者あとがき

275 269 245 215 198 147 117 87 59 37 2

上卷 目次

《人間と世界》

- 1章 人類文化の諸形態
- 2章 哲学の觀念
- 3章 意識と無意識
- 4章 情念
- 5章 他者の認識
- 6章 空間と時間
- 7章 実在
- 8章 死

《実践と目的》

- 9章 人格の哲学的概念
- 10章 倫理と幸福
- 11章 義務
- 12章 正義
- 13章 国家
- 14章 労働・交換・経済・社会問題
- 15章 自由
- 16章 哲学と人間学
- 17章 美学の諸問題

下巻翻訳

- 1章～5章、9章 高橋 勝
- 5章（付）～8章 久重 忠夫

認識と理性

Connaissance et Raison

《1章》

言　語

§ 1 人間は話す存在である

ベルクソンは、人間をまず第一に「工^{ホム}作^{クラフト}人」、道具の製作者、技術の発明者と定義した。レヴィ・ストロースにとって人間は、機械の製作者であるよりも、いっそう根本的に「話者」なのである。人間は何にもまして話す存在である。

〔1〕 言^{ラザイク}語、文化の要素

人類に特有の特徴のうちで、他のどんな特徴にもまして言語があげられるのは、なぜだろうか。言語は、人間の文化と呼ばれているもの、すなわち人間が「自然に対して付け加える」もの、生物学的遺伝によって

は祖先からは伝えられずに各世代が見習って身につけていかねばならないもの、道具と技術についての認識や、科学上の知識、集団の倫理的規則、宗教上の儀礼等々を特徴づけているいろいろなもののうちの、ある点では一つの要素にすぎない。私たちは道具について学び、科学について、宗教について教わるのと全く同じように、まずことばを話すことを学ぶのである。

〔2〕 言語、あらゆる文化の伝達手段

しかし、ここでは言語がまったく他に抜きん出た役割を果たしていることは明らかである。言語は、文化のさまざまな要素のうちの一つであるだけではなく、その他の文化的な知識すべての伝達手段でもある。子どもが自分の生まれた文明のさまざまな慣習、倫理的規則、儀礼、信仰などを知るようになるのは、おとなが彼に話しかけるからであり、子どもがあらかじめ母国語を理解し、話すことができるようになっていくからだ。子どもが従わなくてはならない禁止事項や責務とは、まず第一に彼が耳を傾ける話しことばのことである。

〔3〕文字に対する話しことばの優位

「話しことば」と私たちがよく言うのは、読めるようになる前に話すことをおぼえるからである。数千年以前から存在した文字の価値と重要さ（この文字のおかげで人間は「歴史的動物」としての使命、文化の継承者としての使命を十分に果たしている）がどれほどのものであっても、文字を持つ文明に先立つ数万年、より秘密には数十万年の間、文字を持たない文明があったことを忘れることはできない。それに今日でもなお、おそらく文字を読めない人間の数は、読める人間の数よりはるかに勝っているし、アンドレ・マルティネが言っているように、どうやったところで、書きことばは「話しことばと重なってはきたが、その逆は決してありえない」（『一般言語学要説』）ことを忘れることはできない。

〔4〕話しことばとその基本的な伝達機能

話しことばはそれ故に、社会的動物である人間に特有の記号（しるし）である。なぜなら、言語の本来の機能は個と個の間の伝達（意志疎通）だからである。ロー

マン・ヤコブソンはきわめて正確に、次のように書いている。「話す行為はあるメッセージとそれにつながる四つの要素を活動させる。その四つの要素とは、送り手、受け手、メッセージの主題、使われるコードである」（『一般言語学試論』）。「コード」とはまさに、伝達の対象そのものたるメッセージの言語学的道具のことである。もちろん、人類を固有に定義するこの伝達は、単に垂直的な、それによって上から下への、一家の父親や学校の先生や教会の司祭が子どもにいろいろな決まりや知識や集団の儀礼を教え込むところの伝達であるにとどまらない。それはまた水平的な伝達でもあって、これによって他者から私たちは情報を受け取り、そして私たちが他者に情報を伝える。ここでは、どんな人間社会も交換の上に成り立っていることを、思い起すことが大切である。最もはっきりしているのは経済的な交換である。古代社会では無条件の物々交換で、現代では、私が労働を金銭（賃金、報酬もしくは利潤）と交換し、金銭を商品と交換するという方法で行なっている。ところで、人間生活のあらゆる場面は、交換というしるしに支配されているのだ。

たとえば近親相姦の禁止は、聖トマス・アクィナス

が子感し、レヴィ・ロースが示したように、交換の義務、すなわち、君は妹を友人に嫁がせ、その友人の妹と結婚する、という交換の義務と表裏をなしている。そして、人間社会を基礎づけている契約はすべて（互恵の原理にしたがつて、つまり私は果すべき義務を約束し、見返りに権利を得る）、必要不可欠な条件として、カントの言葉を借りるならば先験的条件として、ことばの交換であるところの原初的交換を前提していることを忘れるべきではない。すなわち、「話し手」は物をもっと扱いやすく、物のかわりをするることばに交換することから始める。それから、自分のことばを聞き手のことばと交換する。言語的交換には二人の交換者を豊かにすることをうながす利点さえある。もし、私たち二人がめいめい百フラン貨幣を一個持っていてそれを交換し合ったところで、私たちはそれぞれ依然として貨幣を一個持っているだけだろう。しかし、私たちがそれぞれ一つの考え（ことば）によって表現される）を持っていて、この考えを交換し合うならば、私たちはそれぞれ二つずつの考えを持つことになるのである。

〔5〕 誤まりの問題、言語の起源

こういつた見解から、私たちは、かつて哲学者たちを長い間、しかも実りのない仕方（そのために、パリ言語学会は会員にこのテーマについて発表することを禁止したほどだ！）とりこにしてきた問題を誤まりの問題として、直ちにしりぞけることができる。それは言語の起源という誤まりの問題のことである。それは科学的問題ではないことに、まず注意しておきたい。というのも、この問題は実証的立論の可能性外の問題であるからである。言語学が、歴史的問題だけに首を突っ込んでいた時期（今日から見れば昔のことだ）にも、言語の起源の問題は、言語の現在の状態を説明するにはそれ以前の言語の状態によるという点にしばらくれていた。しかし、一般的にいつて言語の究極的な起源という問題は事実の領域からはみ出している。そして結局のところ、これは哲学の問題でもない。なぜかといえば、言語のない人間の社会があつて、ある日、やがては探究されなくてはならない何らかの理由のために、話し始めたなどということは想像できないからである。それは、人類が孤立した個人から構成されて

いてある日から群を成すようになった、などとは想像できないのと同様である。人間は、まず本質的に社会的動物であり、話す動物なのである。言語の起源の問題は特殊な問題ではなく、どうしても問題にしようとするれば、人間の起源の問題と一つになってしまふ。

いずれにせよ、「言語とは何か」という問いが「人間とは何か」という問いと、どれほど一体であるかはわかる。人間は本質的に、自分の同胞と意志を疎通させる存在だからである。だから、今日発達中のあらゆる人間科学が、ますます言語学から「模範」を借りるようになっており、今日ではふつうによくいわれるように言語学が、他のすべての人間科学の「水先案内人」の役を果たすようになったからと言って私たちは驚くべきではない。

〔6〕 言語のさまざまな機能

言語をそのいくつかの機能のうちの一つにしかすぎないもの、すなわち伝達にのみ帰するのはおそらく間違いだらう。伝達、情報の役割とならんで、言語はまた表現の機能をも持っていることが分かる。伝達の役割を果たす前に言語は、「人間の身体にとって世界を

体験し、たたえる一つの方法なのである」とメルロ＝ポンティは述べている。

ガストン・バシュラールは言語の表現能力の素晴らしい例を提示して、たとえば次のように書いている。

「反呼吸の語というものがあり、それらが私たちに息苦しくさせるのである。それらの語は、私たちの表情の上に私たちの拒絶の意志を書きつける。もし、哲学者が語を用いてすぐ考えるかわりに、唇にそれらの語を上手にのせるつもりであるならば、一つの語は発音されるか、または発音することを想像しただけで、その存在のすべてを実現していることに気づくだろう。たとえば、人がどれほど真剣に毒氣イクシムという語を発音するか、見るがよい。それは一種の擬態語……嫌悪を表わす擬態語ではないだろうか。汚れた空気がまったく一息で吐き出され、唇が力強く閉じられる」(『休息の夢』)。

ことばは、世界を意味すればするだけ世界を演じ、世界を真似る。この表現の機能に、言語の魔術的機能が結びつく。ことばは、物から離れて物をやすやすと支配し、治めているように見える。ことばはまだ存在しないものを語り、消え去ったものを甦よみがえらせる。神話

は、ギリシアの語源によれば、ことばそのものである。多くの神話が、手でふれることのできないこの至高のもの、ことばを、世界の創造の源だとしている。ヴィクトル・ユゴーはことばの魔術的力を次のように歌った。

ことばを男の上に置くがよい、男は打ち震え
干からび死んで行く、深い力に貫かれたからだ。
復讐者たることばを世界の脇腹に突きつけよ
すると世界は、大槓と剣と処刑台と
法と慣習と神を引き出してくるが、ことばの下
に崩れ落ちる。

語を所有する者は、物を、あるいは指し示された存在を所有する。ローマの都は秘密の名を持っていて、この都そのものが敵の呪詛からの隠れ家となるように神官たちによって大切に守られてきた。

そしてまた、言語の魔術的機能に美的機能を結びつけることもできよう。言語の呪詛的能力は、詩の中に保持されていないだろうか。詩人の歌はラテン語でカルミナだが、これは魅惑を意味する。ポール・ヴァレリーの詩集『魅惑』の題名に与えなくてはならないの

は、この意味である。

しかし、言語の表現的・魔術的・美的機能はそれ自体、根本的条件として、伝達機能を前提している。ひとが自分を表現し、物を真似るとしたら、それは常に聴き手や観る人のためである。魔術の呪文は、魔術師とその犠牲者との間のある種の関係、交流を前提としている。言語はあらゆる形式の下で常にしっかりと人間の社会生活と結びついている。アンドレ・マルティネが言っているように、「言語というこの道具の中心的機能として保持されなくてはならないのは、…：伝達である」(『一般言語学要説』)。

人びとが、独り言を言うような人間をからかうことをやめないのはこのためだ。そういう人とはふつう酔っぱらいとか、退行状態にある老人とか、あるいは精神錯乱者などである。話すことばは、それ以前の正常な社会生活の残りものである。独り言をつぶやく人間とは時には学者であり、哲学者であるのもほんとうだ。しかし、この場合、その孤独は見せかけだけにすぎない。

(1) ローマはギリシア語 (romē) で力を意味する。おそらく、ローマの本当の名はヴァルシニアであって、そのギリシア語であるローメーに対応する。

い。おそらく彼は、これから行われる学会でなにか発表する準備をしているのだろう。つまり、彼は新たな交換に備えているのだ。なぜならば、ローマン・ヤコブソンが言っているように、「言語の領域で個人的財産というものは存在しない。すべてが社会化している」(『一般言語学試論』)からである。

そこで言語は、なによりもまず情報の伝達として私たちに現われてくる。しかし、この意味で言語が受けとられるのなら、言語が本当に人間に固有なものかどうか、私たちは自問する必要がある。現代科学にとっては、実際、情報の概念は大きな広がりを持っている。これは物理学者の概念なのである。他方では、動物心理学の専門家は昆虫の社会における情報の交換について語っている。

§2 情報理論

「1」情報という語の二つの意味

情報(インフォメーション)という語が伝統的に二つの意味を持って

いることを、まず第一に思い出しておこう。その一つは——アリストテレスの意味で——ある形式の、独特の構造の伝達を意味し、最初は等質であった素材に「形式を与える」独自の特性をもった組織の交流・伝達を意味する。彫刻家が等質の大理石の塊に「形式を与え」、たとえば、ヘルメス神の像という形フォルムを与える。他の一つの意味は、現に通用していることばラウンズという意味である。それはメッセージの伝達である。物理学者にとっては、情報の意味は第一の意味と結びついている。すなわち、情報機械は形式を、「循環している特殊な構造」を伝達するのである。

「2」情報機械

二十世紀の最も特徴的な機械は、結局、情報機械である。M・リュイエはその優れた著作『サイバネティクスと情報の起源』で、サムエル・バトラーの『エレホーン』(一八七〇)〔訳注 Ⅱ「どこにもない」noveltéの逆読み〕の中の奇妙な一節を引用している。「今にいたるまで、機械は、人間の感覚という媒介を通して、媒介によって印象を受け取っている。走っている機関車は、別の機関車に鋭い警戒の叫びを投げかけると、

その機関車はただちに道を譲る。しかし、一方の機関車が別の機関車に印象を与えるのは、機関士の耳を通してだ。機関士がいなかったら、呼びかけられた方の機関車は呼びかけた機関車の叫びが聞こえなかったろう。機械が音によって、人間の耳を介在させるにせよ、その必要を報せることなどありえまいと思われていた時がかつてあった。こうしたことが実現したのであるから、機械が人間の耳を必要としなくなり、機械の組織の精巧さのおかげでものを理解し得る日がやってくる、と想像することはできないだろうか」。

事実、一八六八年以来、マックススウェルはそれ自体で「情報を得る」ことのできる機械の一つを研究していた。ボール調速機がそれである。この機械のおかげで、蒸気機関は一定の速度で動くのである。機械が全速度で回転すると、その調速機は次のような仕組みで「報せを受ける」。すなわち、遠心力がボールを持ち上げる。このことが、結局、トランスミッションを紹介して、吸気を減らすように働くのである。これとは逆に、たとえばその機械がより大きな負荷を課せられ、速度が落ちると、ボールがおりてきて、吸気を増大させる。速度の増加の「報せを受けた」調速機は、速度を落し、

また新たな報せを受ける。このようなことが続けられるのだ。これは「円環」であり、「フィード・バック」である。情報がこのように直ちに翻訳され、それに合った反応が生じるのである。

〔3〕 意識抜きの情報

したがって、情報の科学的概念は、この語の日常的な意味合いから、客観的に観察できる行為、行動に関わるものを包括している。それに反して、メッセージの意識という科学的見地からみると付随的な観念をそれは排除している。ごく簡単な例を取り上げてみよう。私は今、事務所です事をしています、寒さをおぼえている。下働きの婦人にそのことを伝えると、彼女はわたしの言いつけに従って、暖炉の通風口をいっそう大きく開く。ここには、ふつうに使われる意味での情報があつた。私の話したことは「理解され」、意識的な動作がそれに続いていった。しかし、セントラル・ヒーティングを設置していると仮定してみよう。周囲の空気が冷えてくると、自動的にボイラーへの小突起が収縮し、そのことが結果として通風口を大きく開く。もし逆に周囲の温度が上昇すると、この小突起は膨張し、通風

口が閉じられる。ボイラーは、フィード・バックのごく簡単なメカニズムによって、周囲の温度についての情報をただちに集めて、その結果自動的に制御される。生ずる結果は同じである。情報を理解したうえで、係りの者がときどき調節するよりは、自動制御の方がはるかに効果的かつ正確でさえある。⁽¹⁾

〔4〕 情報とエントロピー

情報で重要なものは、それゆえに、構造についての効果的伝達・交流である。そこから出発して、私たちは情報理論の根本的原理を、少なくともその大枠は把握できる。すなわち、情報はエントロピーとは逆のことである、というのがそれである。情報とは、すでに述べたように、非定形から定形への、未分化の等質性から特殊な構造への移行なのである。エントロピーは逆に、構造喪失であり、組織破壊であり、等質的なものへの回帰である。棒A Bの一部分a bが、棒の他の部分より温度が高いと仮定しておこう。熱力学の第二法則によれば、徐々にその棒の各部分の温度は、等しくなつてゆく。a bという部分と、棒A Bの他の部分との間の温度差が縮小していつて、ついにはその

棒全体の温度は等しくなる。エントロピー（それは、この構造喪失と非定形への回帰の過程にあつて、増大し続けた）は、そのとき、最大である。もし、私が自分の名を砂に書きつけるなら、私は情報（ふつうの意味で）を伝え、そして同時に私はこの砂に形を与え、構造を与えていることになる。もちろん、風の一吹きでたちまちにこの構造は消滅し、情報は消えてしまう。そして、砂は等質的なものに帰る。情報を破壊するこの過程は、エントロピーとかなり類似している。

最も注目すべきことは、これらの法則は厳密な数学的表現になじむということである。リュイエがこの主題について次のように書いている。「初歩的情報は『諾・否』の二者択一であるか、あるいは、まったく別の「二進法的」決定、つまり、1か0か、右か左かといった決定である。ある点Pがある。その点は線分A B上の一点であることだけが最初わかっているとす

(1) 言語学者ブルームフィールドは、思惟、意識等の概念をはっきりと排除しようとしていた。そして、意味作用の純粹に行動主義的定義を与えようとした。言語学には言表されたものの意味は、まったくただの「状況であり、その中で話し手がこの言表を発し、この言表が聞き手から、行動による応答を引き出すのである」(「言語」)。

る。ついで0によってその線分の左半分を表わし、1によって右半分を表わすものとされる。そして、そのP点が線分の左半分に位置し、さらにその左半分のうちの右半分にあることなどを知らされる。0.010101……という形式の二進法的記数法による数は私たちの情報を表わしているが、この数は1と0の不定の連続では決してありえない。その情報には限定された正確さがある。それはA B間のa bの確率の範囲を、最終的に与えているだけである。A Bからa bへの移行によって得られる情報量は、それゆえに確率の対数である。それを表わす公式はまさしくエントロピーの公式であり、同様に確率の対数の公式であるが、逆のしるしを持っている。この情報は否定的エントロピーである」(リュイエ前掲書)。

〔5〕 人間、情報の唯一の眞の源泉

しかし、哲学者はここで、リュイエと共に、情報の起源の問題を提出する権利を留保している。機械というものは、たとえどれほど完成していようと、ただか、情報を貯え伝達しうるにすぎない。それに機械には常にある種の損失(電話やラジオの雑音)、ある種

の磨滅がある。機械は情報の質を高めたり、造りだしたりすることはできない。たしかに、輪転印刷機は夥しい数の新聞を刷ることはできるが、誤字や組みちがいを訂正することはないだろう。「情報の機械による伝達は情報そのものを説明できない」(リュイエ前掲書)。機械は常に技術者を前提にする。その技術者の意識が装置を発明したのであり、その機械の性能を予測したのである。機械は意識的な利用者と、ときには修理者を前提している。機械というものは、リュイエが言っているように、常に「意識的な意味のある活動によって梓づけられている」(前掲書)。機械は「意識という、さまざまな連関を即刻処理するものによって組み立てられる補助的連関の全体」(前掲書)にすぎない。人間に伝達と情報能力を許しているこの「象徴機能」は人間のみが所有するのであり、機械は、人間からその専売特許となつてゐる思惟する存在、話す存在たることを奪うどころか、その発明者の優位を輝かしく証しているのである。

それゆえに、情報理論は象徴的思惟自体の起源にではなく、その道具に、しかもますます有効になつてゐる道具に関わる。今日それは、何よりも、情報の最も

経済的なコード、すなわち最小の経費で最大の情報を伝達するものについての研究である。

§ 3 動物言語の問題

〔1〕 動物の表現と人間の言語

哺乳類と鳥類が叫びによってその欲求と情動とを表わす、ということは誰でも知っている。チンパンジーは三十種類のそれぞれ異なった音声を発する。空腹、警戒、不安、呼びかけ等の叫びである。一つの種に属するすべての個体に共通で、生得的、自然的なこの「言語」は、対象を自分たちで工夫した記号によって象徴するという純粹に人間的な能力と比べるならば、なんら見るべきものがない。バンヴニストが言っているように、「動物は情動を表わすが、それに命名することができない」(『一般言語学の問題』)。人間の言語がさらにその特殊性を持つようになるのは、単に「情動・感情の」表現であることを止めて事物を表現するようになり、心的傾向からいっそう離れて客観的事実

を代弁し伝達するようになる時のみである。アルダーヌによれば、子どもが母親に、「お腹がへった、眠いなどと言う時には、その子どもはまだ動物に近い。子どもが、これはぼくが今朝作ったものだよ、と言うようならば、その子供は人間になり始めている」(シヨッシャル『言語と思维』に引用)。

〔2〕 言語と条件となる信号

外見上は、動物の間に実際一種の学習された言語を見出そうとすれば見出せるだろう。というのも、動物は条件付けによって、信号に反応を示しうるようになるからだ。訓練された動物の場合には、鐘の音を聞くとか、鞭を見るとがすることが、そのことに見合う反応を引き起す(パヴロフの条件反射)信号である。いつの場合でも、信号を選んで、訓練によって動物にそれを仕込むのは人間である。条件となる信号と一次的刺激との関係(鐘の音と食事との関係)は、単に動物によって体験されるだけで、思惟によって「検討され」てはいない。実際、子どももまた、条件付けによって、語とそれが指し示す対象とを結びつけることをおぼえる。語とは、その物についての条件となる信号なので

ある。しかし、人間に固有な思惟の役割は、語が似かよっている対象の類全体を指し示すということで、きわめて速やかに明瞭になる。パウロフ自身が次のように書いている。「人間にとって話しことばは、明らかに、動物にも人間にも共通なあらゆる刺激と同じくらい実質的な、条件付けされた刺激なのである。しかしその反面、語は広がりを持ち、他のどの刺激とも違って多くの対象を包み込んでいる。こういった関係の下で、語は動物の条件付きの刺激とは、質的にであれ量的にであれ、いかなる比較もできないのである」(シヨシャル『言語と思惟』に引用)。

〔3〕 蜜蜂の言語

最も興味があるのは、カール・フォン・フリッツシュ(ミュンヘン大学動物学教授)が蜜蜂の言語と呼んでいるものによって提示している問題である。蜜蜂は社会的昆虫であり、この社会の特異な組織、蜜蜂たちの活動の分担と調整などを考えると、この昆虫が情報を交換していることに驚いていられないだろう。

フォン・フリッツシュは草原の真中にガラス張りの巣箱を置き、蜜蜂の活動をすっかり観察できるようにし

た。この蜜蜂の群れのうちの数百匹にそれぞれ目印として、番号を付けた。つまり、さまざまな色の塗料でそれらに斑点をつける。ある活動の単位をなしている蜜蜂の頭部に一の位を、その胸部には十の位の数を、その腹部には百の位の数を、といった具合に目印を付けた。

フォン・フリッツシュは、草原の四隅に、距離を変えて砂糖水を入れた円形の水盤を据えつけた。偵察役の一匹が偶然に水盤の一つを発見して、巣箱に戻った。

このドイツの学者の主な発見は次の点である。すなわち、その偵察役の蜜蜂は、自分が発見したものを他の蜂に報告するのだ。つまり、彼らに真のメッセージを伝達しているのである。その偵察蜂は、あるときには円舞(その砂糖水入りの水盤がわずかな距離のところにある場合。実際には百メートル以下の場合)をし、「尻ふりダンス」を踊る。数字の8を思わせる飛翔を行うのは、砂糖水がさらに遠い場合である。その尻ふりダンスは、食糧がさらに離れたところにある場合には、いっそうゆるやかになる。百二十メートルの距離では、その蜂は十五秒間に十回8の字を描く。数キロの距離では、二回描くだけである。食糧のある方向